

《伊藤 真波》氏

あきらめない心

### 看護師を志す

私の親戚中に医療従事者がおらず、家族が風邪をひいた、怪我をしたという度に慌てる母の姿を見て、看護師になって母を助けようと看護師を志しました。ただ、生来のお転婆は小学生から発揮され、ランドセルの中身は 6 年間殆ど空っぽで通っていました。中学でその罰が当たります。お前このままでは高校行けないぞ、という成績に加え、反抗期で心が荒れており、格好良さをはき違え、看護師？面倒臭くてやってられねえ、と言うようになっていました。

そんな私のもとにある男性教諭が赴任してきます。会社員を辞め教員免許を取り念願の先生になったんだと、どれだけ生徒から馬鹿にされようとも生徒一人一人に声をかける、本当に一生懸命な先生でした。「真波、お前には看護師という夢があるんだろう？」そんな声かけに、私は口では先生、ダサイよと言いながらも、大人ってこんなに頑張れるんだ、こんなに輝けるんだ、自分もこんな大人になりたいと思い始めたのでした。

それを機に勉強頑張ろう！と、塾に通い始めました。出来が悪く、追い出されてもしがみつки、そして静岡県内で数少ない看護科のある高校に入学することができたのです。

### 憧れのバイクでの事故

看護師という夢のほかにもどうしてもやりたいことがありました。それは父のような大きなバイクに乗ることでした。

父はツーリングに行けると大賛成でしたが、問題は母でした。母は進路、幼少期の水泳やバイオリンなどの習い事等、いつも私の背中を押してくれましたが、バイクの時だけは違いました。事故にあったらあなたにどんな責任が取れるのと。

私も親譲りの頑固者です。学費も食費も自分で払っているんだからと、反対を押し切り、バイクの免許を取り走り回りました。母はバイクの音がする度に背を向けました。

そして 2004 年 11 月、事故の朝を迎えます。

実習最終日の朝でした。いつものようにバイクのエンジンをかけ、母に「いきます」と声をかけますが、相変わらず冷たい反応の母を尻目に、バイクで実習先に向かいました。その 10 分後、大きなトラックが目の前に迫ってきました。気づいた時には道路に転がっていました。利き手の右腕がトラックのタイヤに巻き込まれ、その手は言うことを利かなかったのです。何とか片手でカバンの中の電話を探り当て無意識に連絡したのが母でした。あれだけ止めてくれた母。母に伝えなきゃと思ったのです。

救急車で病院に運ばれました。再び目を覚ますと集中治療室に閉じ込められていました。そこで医者が言うのです。これから思っている以上の治療となりますが大丈夫かと。私は、まだ 20 歳。まだ夢叶えていないんです。どんな治療にも耐えるから、お願いだから腕を残してくださいと懇願しました。

治療の辛さはとんでもないものでした。動けないように覆いかぶさる看護師さんに対し、それを蹴落とすくらい動き泣き叫ぶ私。お母さん助けて、そこにいるんでしょ、助けてよ。そんな毎日が続きました。出された

食事は、利き手が動かないのに一体どうやって食べるっていうんだと、毎回見舞いに来た両親に皿を投げつけていました。八つ当たりする場所が両親にしかなかったのです。毎夜布団に覆いかぶさって涙を流さなかった日はありませんでした。事故の1分前でもいいから戻らせてと、どれだけ願ったことか…。

ある日、頑張り一つ言わなかった母が重たい口を開きました。「もう学校なんか行かなくなたっていい、お家でお父さんとお母さんの帰りを待っていてくれたらそれでいいから。もう痛くてしかたがないでしょ。自分の口で言いなさいよ。腕を切ってくださいって。それが責任を取るってことだからね」と。実際、感染も進みもう限界でした。ただ、「切ってください」—この一言を医者に言うのにどれだけ時間がかかったことか。20年間ありがとうね。右腕にそうつぶやく母に対し、私はそんなこと言えるはずもありません。ただ泣くだけでした。

麻酔から目覚めると既に右腕はありません。20歳の私には到底受け入れることは出来ず姿を映す鏡を何枚も割りました。気づけば周りは成人式。祖父母に買ってもらっていた振袖を着ることも叶わず、私の成人式は一体どこにいったのと、両親に手あたり次第ものを投げつけていました。

### 強い自分への決意

ある日、学校の先生がお見舞いに来てくれました。看護学校に戻りたいという意思があるならあなたを学校で待っていますという先生に対し、私はしがみついてお願いしました。「私はこの夢、二度と離しません。戻らせてください」と。現場で使える義手を作ってくること、それが復学条件でした。

兵庫県立リハビリテーション中央病院ならばきっと作ってもらえる、という皆の情報を頼りに私は一人神戸へやってきました。そこで仲間もできました。

ある日、車椅子バスケットボールを見に行く機会がありました。車椅子同士がぶつかり合い、ボールを奪い合う。倒れてもすぐに起き上がって走り出す。もう格好良くてしかたがありませんでした。何かにぶつかってもくじけない強い人間になりたい。いつかなりたい。そう強く思いました。そんな想いで始めたのが水泳でした。この傷跡、まさに自分が一番弱い場所を、隠そうと思ったら隠し続けることもできますが、これをさらけ出さないと、強くなれないと思ったのです。ありのままの姿で戦う競技—これが水泳を始めたもう一つの理由です。強くなりたい。そんな風に思えたのもこの病院で出会った仲間たちのお陰でした。

### 夢の成就へ

義手を作り終え、地元の看護学校に復学します。健常者だった自分がいた世界に、もう一度飛び込んだわけです。当然出来ないことだらけでした。でも、出来ないと言ったら追い出されると思い、何も言えず、人より時間がかかり遅いと言われようとも、何も言いませんでした。堪えるしかないと思っていたある時、職員室に呼ばれ、こう言われました。助けてほしい時は言いなさい、出来ないことはできないと言いなさい、そうすれば私たちは何をすべきかがわかるからと。初めて助けを求めても、甘えてもいいのだと知りました。

無事国家試験にも合格し、恩返しがしたいと神戸で就職しました。看護師としてむしろ地域の方々に育てていただきました。

水泳の方は地元の子どもたちに交じって練習しました。スポンサーには病院になってもらい、トレーナーも自分で見つけました。子ども達、地域の患者様、病院スタッフの方々に支えられて、海外遠征に出かけて

いけるような日本代表メンバーになることができました。自分の環境は自分で整える。それが出来て初めてようやく物が言える立場になれると取り組んできました。そして最後と決めて臨んだロンドンパラリンピックの予選会。この姿を見てもらいたい人がいました。世界相手に戦えているから大丈夫。ありがとうと両親に伝えたかったのです。

試合の日、誰よりも深々と頭を下げていたのも両親でした。その姿を見て、「お家で私達の帰りを待っていてくれたらそれでいい」という優しい言葉に甘えるわけには絶対にいけない、絶対に幸せになってみせる、と改めてそう心に決めました。

そして今、主人と 3 人の娘に囲まれた賑やかな生活を送っています。これまで何度となく見ず知らずの皆さまに助けていただきながら…

### より自分らしく

人は出来なくなった瞬間に、こうしておけばよかったと後悔する生き物で、私の場合はそれがバイオリンでした。

当時、義手を付けてバイオリンを演奏している人は世界を探してもいませんでしたが、楽しそうだねと、専用の義手の制作に取り組んでいただきました。音の強弱や、もっと早く弾くためには…数々の私の疑問に改良を重ね、それに叶う義手が出来上がります。私は東京パラリンピックの開会式で演奏するというもう一つの夢を目指して練習に励み、そうして迎えた開会式。無事弾き上げることができました。

私にはいつも見守ってくれる方々がいる。出来ないと思ったら助けてくれる人がいる。

そんな方々への感謝、日々忘れないようにしています。

今は子どものことで手一杯ですが、いつか、助けていただいた分、地域に何ができるかな…それを日々考えて生活しています。